

科学と社会の共創による環境同位体ネットワークの構築 Platform of environmental isotope monitoring with science in society

谷口 真人^{1*}

Makoto Taniguchi^{1*}

¹ 総合地球環境学研究所

¹ Research Institute for Humanity and Nature

2012年6月のRio+20では、地球環境問題の解決に向けた閣僚レベル会議など様々な議論が行われたが、温暖化防止に向けての取り組みの遅れに代表されるように、先進国と途上国との対立構造や、科学と社会の合意が未だにできない状況に変わりはない。Rio+20を機会に、国際学術会議(ICSU)や国際社会科学会議(ISSC)等の国際機関が、今後10年の地球環境研究の新たな枠組みを示したFuture Earthでは、これまでの問題点を踏まえて、(1) Co-design/ Co-production (科学と社会の共創)、(2) グローバルとローカルをつなぐリージョナルでの解決策、(3) 若手の登用、(4) 学際研究 (interdisciplinarity) を超えた統合研究 (transdisciplinarity) 等を中心概念においたプログラムを推進している。特に Co-design/ Co-production は、初期の段階からすべての利害関係者が問題点を共有し、その解決に向けての道すじを共に創り (co-design)、科学と社会との合意形成を繰り返しながら成果を出す (co-production) 新しい方法である。地球環境問題のように、様々な要因が複雑に絡む問題に対する社会の意思決定には co-design/ co-production に基づく科学的取り組みが必要不可欠である。

一方、GEC各プログラムの統合的研究の必要性から、議論と情報の共有化のためのGEC-Japan Platformがスタートした。その後、地球環境研究への資金提供団体であるベルモントフォーラムがICSU/ISSCやIGFAと連携し、2012年1月に地球研でベルモントフォーラムを開催し、Future Earth関連の国際共同研究公募(淡水資源の安全保障、沿岸の脆弱性)を開始した。またロンドンでのPlanet under PressuresやRio+20、クアラルンプールでのICSU Asia-Pacific regional meeting, そのフォローアップとして地球研でFuture Asia 国際会議等が開催され、Asiaという地域レベルでの地球環境研究の統合の重要性などが議論された。

環境同位体は、地球環境に関する様々な現象の「連環」を「統合的」に「可視化」する道具として重要な役割がある。気象・水文・生態などの個々のモニタリングを統合的にリンクし、ネットワークのプラットフォームを形成する上でも環境同位体が持つ意義は大きい。新しい手法の開発による連環のさらなる解明は、地球環境の統合的理解を進める上で、統合性と拡張性の両面から重要である。Future Earth/Asiaではすべてのステークホルダーが地球環境の問題点を共有し、科学と社会との共創を目指している。ユニバーサルな指標である環境同位体を用いる科学と社会の関係においてもAsiaの特徴が現れる可能性がある。

キーワード: フューチャーアース, 科学と社会との共創, 環境同位体

Keywords: future eaeth, co-design/co-production, environmental isotope